

V マダイ・ヒラメなどの放流について

水産資源を持続的に利用していくために、漁業者が中心となってマダイ、ヒラメ等の種苗の放流を行っています。

特に鹿児島湾のマダイ放流については、昭和55年から行っていますが、一時70トン／年まで落ちこんだ漁獲量が回復したり、放流魚の割合が多いときには、漁獲量全体の6割以上を占めるなど、全国的にも高い放流効果が実証されています。

また、マダイは、多くの遊漁者が利用しており、採捕量は漁業者の漁獲量に相当するとの試算もあります。これらを考慮すると放流効果はさらに大きいものになると推定され、鹿児島湾のマダイは漁業者や遊漁者等の共有の財産になっています。

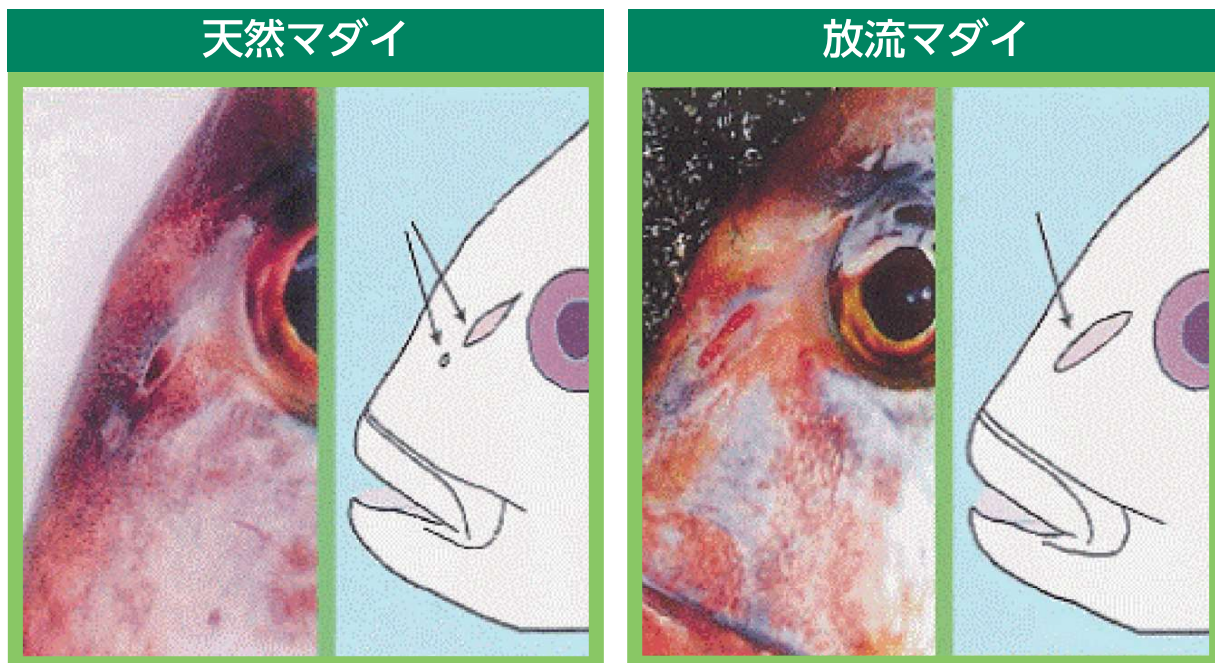
ヒラメに関しても、近年漁獲量が減少しており、放流の重要性が高まっているのが現状です。

漁業者は持続的な資源の利用のために、漁獲のサイズなどに制限を設け、資源を守っています。

放流を続けて行くためには、放流により受益を受ける関係者の応分の経費負担等も検討しながら、持続的な放流体制を構築することが大きな課題となっています。

天然魚と放流魚の見分け方

- **マダイ** ■ 天然…体の左右にハナの穴が2つずつ開いています。
- 放流…ハナの穴が繋がっていることが多いです。



- **ヒラメ** ■ 天然…裏側（無眼側）の体色は白く、色のついた部分はありません。
- 放流…裏側（無眼側）の一部に黒斑が見られます。

